

## 伊平屋島田名方言の動詞の活用

崎山拓真 上門梨緒

### 1. はじめに

動詞は、人やものの動きや変化、状態を語彙的な意味としてあらわす述語になることから、文法的なカテゴリーとしてのテンスとアスペクトをもつ。また、人の意志的な動作をあらわすため、ムード形式をもっていて、命令形、勧誘形、禁止形などがある。

今回は 2016 年 9 月 4 日、5 日に伊平屋島田名集落で調査した、38 個の動詞の活用について報告する。なお調査した形式は、非過去形、否定形、過去形、継続相、中止形である。調査した動詞は以下のとおりである。

飛ぶ、遊ぶ、持つ、行く、縛る、漕ぐ、出す、くれる、落とす、飲む、食べる、降る、蹴る、起きる、降りる、落ちる、捨てる、洗う、買う、言う、掘る、売る、被る、閉じる、寝る、降りる、酔う、着る、切る、する、ない、ある、いる、来る、見る、食う

### 2. 動詞活用のタイプ

伊平屋島田名方言（以下、田名方言）の動詞の個々の形態論的な形は、標準語と同様に語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素に分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現する役割をもっている要素」であり、語尾は、「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づける役割をもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である<sup>1</sup>。

田名方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの変種が存在する。基本語幹と音便語幹は現代日本語にもみられるが、連用語幹は、奄美沖繩諸方言に特徴的にみられる。動詞の語幹（基本語幹、連用語幹、音便語幹）と語尾のつくり方から、田名方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞にわけることができる。規則変化動詞はさらに、強変化動詞と混合変化動詞にわかれる。強変化動詞は、基本語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ。

混合変化動詞は、音便語幹をもたず、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

強変化動詞も、混合変化動詞も語幹のつくりかたによって、それぞれに下位の変種がある。強変化動詞は、基本語幹末にあらわれる子音のちがいに応じて語幹の変種のあらわれ方や語尾の変種のあらわれ方が異なるため、m 語幹動詞、b 語幹動詞のように名付けて呼び

<sup>1</sup>語幹、語尾の定義は、鈴木重幸（1972）、同（1983a）、同（1983b）にしたがう。

分ける。混合変化動詞は、中止形の語幹が1音節か、1音節以上かで分かれる。それぞれ1音節動詞、2音節動詞と呼び分ける。なお、基本語幹は否定形の語幹を代表させて、それぞれ分類していく。語幹と語尾の境界には「-」を挿入する。

・語幹について

基本語幹とは命令形、勧誘形のような動詞の屈折の語幹である。基本語幹を構成要素にもつ動詞の形式は、否定形、命令形、勧誘形などがある。今回は調査のデータから否定形を代表させている。音便語幹とは音便によって生じた語幹で、基本語幹から派生したかわり語幹である。音便語幹を構成要素にもつ形式は過去形である。連用語幹は奄美沖繩諸方言に特徴的にみられる語幹で、構成要素にもつ形式は中止形、非過去形、継続相である。

2.1 強変化動詞

強変化動詞は、現代日本語の強変化動詞(鈴木重幸 1972 の第一変化)に対応するもので、混合変化動詞と活用のタイプが異なっている。現代日本語の強変化動詞のように田名方言の強変化動詞も音便語幹を有する。基本語幹は否定形、音便語幹は過去形、連用語幹は中止形、非過去形、継続相にみられる。

(1) k 語幹動詞

k 語幹動詞は、mucun(持つ)、kuncun(縛る)、ntsun/ncun(見る)、icun(行く)などがある。この動詞は、基本語幹の末尾がkで、連用語幹末の子音はcである。なお、icun(行く)は、過去形と中止形のとき有声子音zjであられるk語幹動詞のバリエーションである。

今回の調査では得られなかったが、過去に調査された全集落調査票の調査結果では、「見る」の活用は、nu:n(見る) na:n(見ない) nca(見た) ne:n(見て)という形式になっている。今後「見る」には2つの形式がある可能性も考慮しながら調査する必要がある。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
k	持つ	muk-an	mu-can	muc-un	muc-e:	muc-o:n
k	縛る	kunk-an	kun-can	kunc-un	kunc-e:	kunc-o:n
k	見る	ink-an	n-can	nts-un/nc-un	nc-e:	
k	行く	ik-an	n-zjan	ic-un	nzj-i <sup>2</sup>	

(2) g 語幹動詞

g 語幹動詞には huzjun(漕ぐ)がある。基本語幹末子音はgで、連用語幹末子音はzjである。

<sup>2</sup> 田名方言の中止形は muc-e: (持つて)、kunc-e: (縛って) のように-e:であられるが、今回の調査で、他の琉球諸方言にみられる-iで終わる形式がいくつかあらわれた。これは首里方言や他の地域の方言との接触による可能性がある。これらの形式については要検討である。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
g	漕ぐ	hug-an	hu-zjan	huzj-un	huzj-i <sup>3</sup>	huzj-on

## (3) h 語幹動詞

h 語幹動詞は nzjahun (出す)、turahun (くれる)、utusun (落とす)、hun (する) がある。基本語幹末子音と連用語幹末子音は h である。「落とす」は、s 語幹動詞のような形式であらわれたが、田名方言では、\*s>h の変化がみられることから、この「落とす」も h 語幹動詞である可能性が高い。これは首里方言や他の方言との接触によって s 語幹動詞のような活用になっていると考えられる。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
h	出す	nzjah-an	nzja-can	nzjah-un	nzjah-e:	nzjah-on
h	くれる	turah-an	tura-can	turah-un		
h	落とす	utus-an	utu-can	utus-un	utusj-e:	
h	する	h-an		h-un	h-e:	

## (4) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、numun(飲む)、kamun(食べる)などがある。この動詞は基本語幹末子音、連用語幹末子音が m である。なお、過去形の語尾の子音は nu-nan (飲んだ) のように n になる単語と、ka-dan (食べた) のように d になる単語がある。これは他の m 語幹動詞 (つかむ、頼む、縮むなど) の過去形を調査し、検討しなければならない。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
m	飲む	num-an	nu-nan	num-un	num-e:	num-o:n
m	食べる	kam-an	ka-dan	kam-un	kam-e:	

## (5) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tubun (飛ぶ) asibun (遊ぶ) などがある。基本語幹末子音、連用語幹末子音は b である。遊ぶについては、asibun とは別に asuwun という形式が確認できた。伊平屋方言では、wa:ki(ざる)や、wa:pe:(まちがい)のように、他の琉球諸方言で ba であらわれるものが wa になる音韻変化がみられる (\*ba>wa)。否定形などでも tuw-an (飛ばない)、asuw-an (遊ばない) の形式になることが予想されるが、今回そのような語形は確認できなかった。他の方言との接触によって、b 語幹動詞は全体的にゆれている可能性があるため、

<sup>3</sup> この形式も述べたシ中止形であられる例

他の b 語幹動詞でも調査する必要がある。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
b	飛ぶ	tub-an		tub-un	tub-e:	tub-on
b	遊ぶ			asib-un		
b	遊ぶ		asu-dan	asuw-un	asub-e:	

(6) r 語幹動詞

r 語幹動詞には、hujun (降る)、ki:jun (蹴る)、ko:-in (買う)、ara-in (洗う) などがある。基本語幹末子音は r で、連用語幹末は母音になっている。「洗う」、「買う」は現代日本語では語幹末が母音になるが、田名方言のばあい語幹末に r があらわれていて両者の語幹末が対応しない。同様に現代日本語の弱変化動詞に対応する田名方言の動詞の基本語幹末子音も r になっている。この現象をかりまた (2006) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
r	降る	hur-an	hu-tan	hu-jun	hu-e:	hu-jo:~N
r	被る	haur-an	hau-tan	hau-in	hau-e:	hau-jo:~N
r	掘る	hur-an	hu-tan	hu-in	huj-e: (hui-e:)	hu-jo:~N
r	売る	ur-an	u-tan	u-in	u-e:	u-jo:~N
r	閉じる	ku:r-an	ku:-tan	ku:-in	ku:-e:	
r	寝る	nu:r-an	nu:-tan	nu-in	nu:-e:	nu:-jo:~N
r	いる	ur-an	u:-tan	u-n		
r	買う	ko:r-an	ko:-tan	ko:-in	ko:-e:	
r	洗う	arar-an	ara-tan	ara-in	ara-e:	ara-jo:~N

2.2 混合変化動詞

混合変化動詞は、現代日本語の弱変化動詞 (鈴木 1972 の第二変化、いわゆる一段動詞) に対応し、音便語幹をもたない。現代日本語の弱変化動詞の基本語幹が母音でおわり、強変化動詞の基本語幹が子音でおわっているのに対して、田名方言の混合変化動詞の基本語幹の末尾は子音になっていて、その点は現代日本語とはことなっている。これは前述したように田名方言のばあい、弱変化動詞の基本語幹が r 語幹化したためである。混合変化動詞は、音便語幹をとりたてて設定する必要がなく、連用語幹の末尾が母音でおわるなど、現代日本語の弱変化動詞とおなじ特徴も有して、田名方言のばあい、弱変化動詞と強変化動詞の混合の活用をするようになっている。

現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の混合変化動詞は、基本語幹の末尾が -r

になっていて、ここでも r 語幹化がみられる。現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の動詞を混合変化動詞とする要因になっている。

現代日本語のばあい、弱変化動詞には基本語幹末の母音が～e（下二段活用）になる動詞と、～i（上二段活用）になる動詞とがあるが、伊平屋方言のばあい、前者の～e に統一されている。琉球語全体におきたせま母音化のため、いずれも i になっていて、わかりにくいのであるが、i に先行する子音が口蓋音化していないことから、いずれも \*e（下二段活用）に対応する。過去形、中止形の語幹末母音が i であれば混合変化動詞である。

		基本語幹		連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
1	着る	ci:r-an	ci:-tan	ci:-N		ci:-e:
1	蹴る	ki:r-an	ki:-tan	ki:j-un		ki:-e:
1	酔う	wi:r-an	wi:-tan (bi:-tan)	(w)i:-N	wi:-jo:N	wi:-e:
1	言う	ir-an	is-san	i:r-un		j-e:
2	起きる	ukir-an	uki-tan	uki-un (uki-N)	uki-jo:N	uki-e:
2	落ちる	utir-an	uti-tan	uti-N		uti-ti
2	捨てる	sitir-an	siti-tan	siti-N	siti-jo:N	siti-e:

### 2.3 特殊変化動詞

「ある」は基本語幹がわからなかったため、今回は特殊変化動詞に分類した。だが、「いる」と同様に r 語幹動詞である可能性がある。「食う」については、不規則な活用をしているため特殊変化動詞に分類したが、その他の形式も調査し、分類する必要がある。

		基本語幹		連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
I	ある		a:-tan	a-N		a-e:
II	ない		ne:n-tan	ne:-N		ne:na
III	来る	k-u:N	c-a:N	c-un	c-o:N	c-i: <sup>4</sup>
IV	食う	kwa:-N	kwa:-tan	kwe:-N(hwe:-N)		kwa:-e:

#### 活用のタイプ

田名方言の強変化動詞は、現代日本語の強変化動詞に対応し、混合変化動詞とことなり、音便語幹を有する。混合変化動詞は、現代日本語の弱変化動詞に対応し、音便語幹をもたない。現代日本語の弱変化動詞の基本語幹が母音でおわり、強変化動詞の基本語幹が子音でおわっているの

<sup>4</sup> シ中止形であらわれている例

に対して、田名方言の混合変化動詞の基本語幹の末尾は、子音になっていて、その点は現代日本語とはことなっている。これは田名方言のばあい、弱変化動詞の基本語幹が r 語幹化したためである。混合変化動詞は、音便語幹をとりたてて設定する必要がなく、連用語幹の末尾が母音でおわるなど、現代日本語の弱変化動詞とおなじ特徴も有している。田名方言のばあい、弱変化動詞と強変化動詞の混合の活用をするようになってきているためである。以下に活用のタイプをまとめる。非過去形の語尾のタイプは、-N、-uN、-iN の3つのタイプに分かれる。

表 1

		基本語幹	連用語幹	音便語幹
k1	持つ	muk-an	muc-un	mu-can
k2	行く	ik-an	ic-un	n-zjan
g	漕ぐ	hug-an	huzj-un	hu-zjan
h	出す	nzjah-an	nzjah-un	nzja-can
m1	飲む	num-an	num-un	nu-nan
m2	食べる	kam-an	kam-un	ka-dan
b	遊ぶ	asib-an	asib-un	asu-dan
r1	降る	hur-an	huj-un	hu-tan
r2	被る	haur-an	hau-in	hau-tan
r3	買う	ko:r-an	ko:-in	ko:-tan
r4	洗う	arar-an	ara-in	ara-tan
混合変化動詞 (弱変化)				
1	着る	ci-r-an	ci:-N	ci:-tan
1	蹴る	ki:r-an	ki:j-un	ki:-tan
1	酔う	wi:r-an	(w)i:-N	wi:-tan(bi:tan)
2	起きる	ukir-an	uki-un (uki-N)	uki-tan
2	降りる	urir-an	uri-N	uri-e:
2	落ちる	utir-an	uti-N	uti-tan
2	捨てる	sitir-an	siti-N	siti-tan
特殊変化動詞				
I	ある		a-N	a:-tan
II	ない		ne:-N	ne:n-tan
III	来る	ku:-N	cu-N	ca:-N
IV	食う	kwa:-N	kwe:-N(hw-e:N)	kwa:-tan

## まとめ

今回調査した結果をまとめると、田名方言の動詞には、強変化動詞、混合変化動詞、特殊変化動詞のみつつのタイプがある。また、語幹のタイプとして、基本語幹、連用語幹、音便語幹の3つのバリエントが存在する。前述したように、田名方言の中止形の語幹は、連用語幹とおなじ形式になっている。音便語幹は現代日本語で、過去形と強変化動詞の中止形のときにあらわれるが、田名方言は、第二中止形（シテ形式）がなく、第一中止形はシアリ相当形式で中止形をつくるため、語幹末が子音となり、連用語幹と同じ形式になる。

今後の課題としては、動詞の語数を増やして、伊平屋方言の動詞活用の体系を記述する必要があることである。また、nzj-i（漕いで）、uti-ti（落ちて）などのように、中止形の形式が他の地域の語形であるシ形、シテ形であらわれているものがある。またその他の活用形でも、他の地域の方言の影響によるものと考えられる特徴がみられたものもあった。そのような点をふまえて、今後また調査が必要である。

## 【資料】動詞活用表

## 強変化動詞

		否定形	過去形	非過去形	継続相	中止形
k	持つ	muk-an	mu-can	muc-un	muc-o:N	muc-e:
k	縛る	kunk-an	kun-can	kunc-un	kunc-o:N	kunc-e:
k	見る	ink-an	n-can	nts-un/nc-un		nc-e:
k	行く	ik-an	n-zjan	ic-un		nzj-i
g	漕ぐ	hug-an	hu-zjan	huzj-un	huzj-on	huzj-i
h	出す	nzjah-an	nzja-can	nzjah-un	nzjah-on	nzjah-e:
h	くれる	turah-an	tura-can	turah-un		
h	落とす	utus-an	utu-can	utus-un		utusj-e:
h	する	h-an		hw-un		h-e:
m	飲む	num-an	nu-nan	num-un	num-o:N	num-e:
m	食べる	kam-an	ka-dan	kam-un		kam-e:
b	飛ぶ	tub-an		tub-un	tub-on	tub-e:
b	遊ぶ	asib-an	asu-dan	asib-un	asir-o:N	asub-e:
r	降る	hur-an	hu-tan	huj-un	hu-jo:N	hu-e:
r	被る	haur-an	hau-tan	hau-in	hau-jo:N	hau-e:
r	掘る	hur-an	hu-tan	hu-in	hu-jo:N	huj-e: (hui-e:)
r	売る	ur-an	u-tan	u-in	u-jo:N	u-e:
r	閉じる	ku:r-an	ku:-tan	ku:-in		ku:-e:



r	寝る	nu:r-an	nu:-tan	nu-in	nu:-jo:N	nu:-e:
r	いる	wur-an	wu:-tan	wu-N		
r	洗う	arar-an	ara-tan	ara-in	ara-jo:N	ara-e:
r	買う	ko:r-an	ko:-tan	ko:-in		ko:-e:

混合変化動詞（弱変化）

1	着る	ci:r-an	ci:-tan	ci:-N		ci:-e:
1	蹴る	ki:r-an	ki:-tan	ki:j-un		ki:-e:
1	酔う	wi:r-an	wi:-tan(bi:tan)	(w)i:-N	wi:-jo:N	wi:-e:
1	言う	ir-an	is-san	i:r-un		j-e:
2	起きる	ukir-an	uki-tan	uki-un (uki-N)	uki-jo:N	uki-e:
2	降りる	urir-an		uri-N		uri-e:
2	落ちる	utir-an	uti-tan	uti-N		uti-ti
2	捨てる	sitir-an	siti-tan	siti-N	siti-jo:N	siti-e:

特殊変化動詞

I	ある		a:-tan	a-N		a-e:
II	ない		ne:n-tan	ne:-N		ne:na
III	来る	k-u:N	c-a:N	c-un	c-o:N	c-i:
IV	食う	kwa:-N	kwa:-tan	kwe:-N(hwe:-N)		kwa:-e:

参考文献

- 上村幸雄（1963）「首里方言の文法」（『沖縄語辞典』国立国語研究所編）
- かりまたしげひさ（2010）「琉球語田名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- 鈴木重幸（1983a）「形態論的なカテゴリーについて」（『教育国語』72号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録）
- 鈴木重幸（1983b）「動詞の形態論的な形の内部構造について」（『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録）
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店